

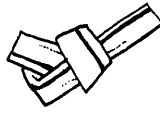
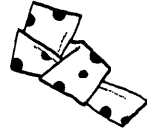


保育者が老いるとき

津守 真

数年前から、私の学校で、小さい子どもが私のことをジージと呼ぶ。だれがそう言わせているのでもない。ごく自然にそう言うのである。

私が子どもと楽しく遊んでいるとき、実習生のお兄さんやお姉さんがあらわれると、その子はごくあっさりとした私を離れてしまう。子どもには若い動きと美しさが魅力なのだろう。私も子どもと同じに同様の記憶があるので、若い人にゆだねて見ていると、なるほどと思わされる。新鮮なエネルギーのぶつかり合いが、活気ある保



育の場を作り出している。それでも子どもが好んで私を選ぶときもある。それは子どもが危機にあるときや、落ち着きを求めているときのよう思う。

毎日子どもと共に過ごす保育者の生活は、心身のエネルギーも時間もすべて子どもに与えているから、大変だけれども、子ども時代のたいせつな時と一緒に過ごしている実感とよろこびがある。子どもが親しみをもって自分の心の奥をあらさまに示すのはこのような保育者に対してである。親が信頼して語りかけるのもこのような保育者に対してである。それを受けて毎日考えながら保育することによって、保育者もまた人間的に成長するから、保育者の生活には何ともいえない真実の喜びが感じられるのである。それだけに、それには大いなる気力と体力を必要とする。

私自身、「古来稀なり」といわれた年齢を超え、他の社会的仕事も加わって、毎日同じ子どもと過ごす保育者の生活は不可能になっている。限られた日数、限られた時間を子どもと過ごすだけなのだが、そういうときに、子どもと一緒にいるのは、短い時間でも貴重に感じられる。

このことは、老年期の時間感覚とも関係があるように思う。現代は長寿社会であるけれども、若いときに比べれば、有限な時間を意識せざるを得ない。それを自覚すると、自分自身の生活でも、将来への効果とは関係なしに、現在のひとときを大切に思

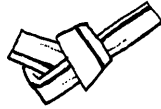


う。この点で、子どもが生きている時間感覚に近くなるのではなからうか。
継続する保育の喜びとは異なっても、一回毎の保育の楽しみはまだ残されている。
毎日つづく保育の中では、ときとして見失われる保育の場の一回性は、老年期に一層
認識される。

保育は身体を通しての仕事である。

年をとると走ったりおぶったりするのが困難になるのも自然なことである。しかし
子どもとかわることによって身体が立ち直るというのも保育の事実である。少しぐ
らい身体の調子が悪いときでも、子どもたちの中に入ると癒されることがあるのは保
育者がよく知っている。人の身体の状態には個人差が大きいから、一概に言うことは
できないが、心身に相関性があることは、若年者も老年者も同じだろう。私の学校に
は、発作を起こす子どもが何人もいるが、それも本人の生活の仕方や、気持ちの持ち
方によって変わるのを見ていると、老年者にも同じことがあるのだろうと思う。

老年になると、若い人から、こんな子どもはどのように保育したらいいのでしょうか
かと尋ねられることが多くなる。しかし、それは経験を積んだ老年の保育者だからと
言って答えられる質問ではない。「こんな子ども」という固定した特性が子どもに貼
りついているわけではない。関係の中で子どもは違う姿を見せる。子どもとの出会い



方、見方の根本を常に考え直し修練することは、年齢を問わず保育者の課題である。

秋の爽やかな一日、五歳の男児がジョウロに水を入れて、門と砂場との間を走って往復していた。地面に水のとがついている。それから、容器に水を入れることを頼みに、その水を砂場の乾いた所にこぼす。水が砂に吸収されてゆくのをしっと見ている。それは私にも面白く、子どもの頼みに答えて何十度も私は水を運んだ。

こうしてゆっくりと過ごしていた最中に、その子は私の手を引いて、突然私の左手を噛んだ。私が思わず痛いという、ことばを話さないその子は、何か口の中で言いながら庭を歩き、右手も噛もうとした。庭の遊具に上るのにも私に上半身をあずけて足だけのぼらせる。私にはなかなか重くて苦勞である。それを何度もやった。やりながら私はふとその朝のことに気が付いた。

その子は、庭の側溝の鉄の格子の蓋をあげて欲しかった。私は最近毎日保育に出ている人ではないので、担任の先生の顔を見て、あげてもいいかと尋ねた。担任は、しばらく掃除をしていないからと言ったので、私は格子をあげる真似だけしてあかないと言った。こういうことは子どもにはすぐに分かるのだと思う。その子は、私が自分で判断しないで他人にたずねて決めたのを見ていた。

この子とは私は最近も何度かつきあいがある。先週は、この子が満足するまで絵の



具で戸棚を塗った。この子はそんなことはさせてもらえないかと思っていなかったようだった。それも私自身の判断ではなくて、他人がいいと言ったからそうしたのだろう、なんだインチキだったのじゃないかとこの子は言っているように思った。それで怒って私の手を噛んだのだと。いや、「怒って」と表現するのは適切ではない。この子は、あの格子の場面をめぐる私とのことが頭から離れず、その問題が解決していなかった。それで私に苦勞なことをさせていたのだろう。そのことに気が付いて私はこの子に、もし格子をあげたいならあげてあげると何度も言ったが、子どもはもはや聞いているのかも分からなかった。

そのことよりも私との関係の方が彼には重要だった。私はその子に本気に答えることに一生懸命になった。この日、この子は何度も私の手を引きに来て、私に親しみを寄せた。

帰りがけ、私は母親にこの日の私の体験を話した。母は、そうなんです。この間も同じようなことがあったんですと家庭でのできごとを話し始めた。

この日の夕方、担任の先生が、溝の重い格子を持ち上げて、溝の掃除をしていたのは特別に印象的であった。

(愛育養護学校)